

付録1 渦位保存の導出

(1) Kelvinの循環定理と渦位の保存

ここでは、Kelvinの循環定理から断熱過程で摩擦なしのとき、渦位が保存することを示す。渦位の保存は、渦度方程式からの導出ができるが、本質的にはここで示すことと同じである。これらについては、二階堂(1986)やLackmann(2011)4.3項などが参考となる。

流体とともに動く任意の閉曲線 C をとり、 C に沿う循環 $\Gamma = \int_C (\mathbf{v} \cdot d\mathbf{l})$ の時間変化は、

$$\frac{D\Gamma}{Dt} = \int_C \left(\frac{D\mathbf{v}}{Dt} \cdot d\mathbf{l} \right) + \int_C \left(\mathbf{v} \cdot \frac{Dd\mathbf{l}}{Dt} \right)$$

となる。ここで、 \mathbf{v} は慣性系の速度を示す。 ρ を密度、 p を気圧、 \mathbf{g} を重力加速度、 \mathbf{F} を摩擦力とすると運動方程式は、 $\rho \frac{D\mathbf{v}}{Dt} = -\nabla p - \rho \mathbf{g} + \mathbf{F}$ と書けるので、これを上式へ代入して、

$$\frac{D\Gamma}{Dt} = - \int_C \left(\frac{1}{\rho} \nabla p \cdot d\mathbf{l} \right) - [gz]_C + \int_C \left(\frac{1}{\rho} \mathbf{F} \cdot d\mathbf{l} \right) + [|\mathbf{v}|^2]_C .$$

$[]_C$ は、閉曲線 C を一周したときの差を表すが、 gz と $|\mathbf{v}|^2$ は不連続に変化はしないのでゼロとなる。また、断熱であるとき、閉曲線 C は等温位面上を動き、密度 ρ が圧力のみ関数となることから、圧力関数 $A = \int \frac{1}{\rho} dp$

を導入して、 $\nabla A = \frac{1}{\rho} \nabla p$ とできるので、右辺第一項はゼロとわかる。摩擦がないとき、右辺第三項がゼロとなることは言うまでもない。以上から、断熱で摩擦がないとき、流体とともに動く任意の閉曲線 C に沿う循環は保存することがわかる。これを Kelvin の循環定理という。ここでは地球大気の運動方程式から導いたが、一般的な Kelvin の循環定理の導出は、流体力学の教科書など参考にしていただきたい。

一方、ストークスの定理を用いると、

$$\Gamma = \int_C (\mathbf{v} \cdot d\mathbf{l}) = \iint_S \boldsymbol{\eta} \cdot d\mathbf{s}$$

断熱であるとき、閉曲線 C は等温位面上を動くので、閉曲線 C に囲まれた面 S を等温位面上に取ることができ、 $d\mathbf{s} = \frac{\nabla \theta}{|\nabla \theta|} ds$ から、

$$\Gamma = \iint_S \frac{\boldsymbol{\eta} \cdot \nabla \theta}{|\nabla \theta|} ds$$

これを温位 θ で積分して、等温位面に垂直な座標 h を用いると、 $dh = \frac{d\theta}{|\nabla \theta|}$ となること、面 S は流体とともに動くので、質量保存から $\rho ds dh$ が一定であることを考慮すると、

$$\int \Gamma d\theta = \int \iint_S \frac{\boldsymbol{\eta} \cdot \nabla \theta}{|\nabla \theta|} ds d\theta = \int \iint_S \boldsymbol{\eta} \cdot \nabla \theta ds dh$$

$$\begin{aligned} \frac{D}{Dt} \int \Gamma d\theta &= \frac{D}{Dt} \int \iint_S \frac{\boldsymbol{\eta} \cdot \nabla \theta}{|\nabla \theta|} ds d\theta = \int \iint_S \left(\frac{D(\boldsymbol{\eta} \cdot \frac{\nabla \theta}{\rho})}{Dt} \right) \rho ds dh + \int \iint_S \left(\boldsymbol{\eta} \cdot \frac{\nabla \theta}{\rho} \right) \left(\frac{D(\rho ds dh)}{Dt} \right) \\ &= \int \iint_S \left(\frac{D(\boldsymbol{\eta} \cdot \nabla \theta / \rho)}{Dt} \right) \rho ds dh \end{aligned}$$

これが、任意の閉曲線 C に対してゼロとなるためには、 $\rho ds dh \neq 0$ なので、

$$\frac{D(\boldsymbol{\eta} \cdot \nabla \theta / \rho)}{Dt} = \frac{DP}{Dt} = 0$$

であることがわかり、渦位の保存が導かれる。また、渦度については、

$$\frac{D\Gamma}{Dt} = \iint_s \frac{D\boldsymbol{\eta}}{Dt} \cdot d\mathbf{s} + \iint_s \boldsymbol{\eta} \cdot \frac{D(d\mathbf{s})}{Dt} = 0$$

から、流体とともに動く座標での絶対渦度 $\boldsymbol{\eta}$ の時間変化は、 $\boldsymbol{\eta} \cdot \frac{D(d\mathbf{s})}{Dt}$ の変化とわかる。これから絶対渦度 $\boldsymbol{\eta}$ が保存するのは、 $\boldsymbol{\eta}$ に垂直な面の面積が流体の運動に伴って変化しないときである。これは断熱過程では、等温位面上で非発散であるときと言える。

(2) 非断熱過程と渦位の傾向方程式

静圧平衡を仮定するとき、温位座標系の渦度方程式から、渦位の傾向方程式

$$\frac{DP}{Dt} = -g \frac{\partial \dot{\theta}}{\partial p} \zeta_{a\theta} + g \frac{\partial \theta}{\partial p} \mathbf{k} \cdot \left[\nabla \dot{\theta} \times \frac{\partial \mathbf{v}}{\partial \theta} \right] + g \frac{\partial \theta}{\partial p} \mathbf{k} \cdot (\nabla \times \mathbf{F})$$

が導かれる。右辺の各項は、鉛直方向の非断熱加熱の差による渦位の変化、鉛直シアアがあるときに水平方向の非断熱加熱の差により生じる渦位の変化、摩擦による渦位の変化を表す。なお、この渦位の傾向方程式の導出については、Lackmann (2011) 4.3 項などを参考いただき、ここでは省略する。

参考文献

- Lackmann, G., 2011: Midlatitude synoptic meteorology: dynamics, analysis, and forecasting. Amer. Met. Soc., ISBN 978-1-878220-10-3, 345pp.
- 二階堂義信, 1986: Q-map (等温位面上で解析された渦位分布図) — その 1 Q-map の原理. 天気, **33**, 289-300.